Vol.180　関東灘　神埼町の酒造まつり　（平成22年3月25日）

先日、市の企画財政課の方達が打合せに来られて帰り際に思い出した様に「君津市には一つの町に六つも酒蔵があるのは全国に類例がないのですから観光資源としてもっと育てたいものですね･･･」と言い残して帰られました。

帰られてすぐに思い出したことは昨年「利根川沿いの小さな神崎町で酒蔵祭りが行われ、町の人達が驚くほど多くの人々が集った」と言う新聞記事でした。すぐに神崎町商工会へ電話すると明後14日の10時からですと教えてくれました。

14日朝快晴、9時に館山道から東関道へ乗り継ぎ順調に走り大栄インターへ下り、途中私の好みのベーコンを売っている「秀じいの店」により神埼へついたのは11時少し過ぎていました。
田畑を使った1万坪余りの臨時駐車場はすでに満車の状態、やっと隅へと入込んで駐車をいたしました。
この日訪れた人の数は駅から3千人、車で3万2千人と聞きました。人口6千人余りこの小さな町へ3万5千人の大群衆が押しよせたのですから、狭い町中は歩行者天国ではなくまさに「足止天国」状態でした。

ちょうど久留里のまちに例えるならば上町、仲町、下町、新町そして駅前広場まで立錐の余地のない人、人、人の頭ばっかりでした。その混雑の中に路上出店200店ですから私達はお目当の「仁勇鍋店」「5人娘寺田本家」の庭先へも足を踏込むことも出来ず入ることをあきらめました。商工会の青年部の方にきいて見ました。「どうしてこんなに人を集めました？！」「仁勇さんが12回の蔵祭り、寺田さんが4回目の蔵祭り、一緒にやるのは今年で2回です。2軒の努力の結果ですが、なぜこんなに集るのかは私達にも分りません！！」女性会の方達に「こんなに集るのはなぜでしょう」と聞いたら「私たちも不思議に思っています」と町の人達までが余りにも多いのにビックリの程でした。

テーマは「自然発酵の里」、酒造り・味噌・ひしお・発酵食品の数々は、味噌・漬物・野菜・フルーツ・木竹工芸品・手染・手作りの衣装飾品・発酵パン・せんべい・ケーキ・リサイクルさてはマッサージや耳かきまで、町の商工会、町民総動員での祭りとなっていました。

帰りに駐車場のナンバーを見ますと水戸、横浜、練馬、足立、大宮、栃木、柏･･･と凡そ50キロ圏の車でした。

かつて利根川水運の盛んな昭和初期には蒸気船百余隻、帆船が30余隻が毎日上り下りして、関東灘と言われ酒造七家、醤油造三家と共に栄えた神崎は今でこそさびれた町ですが、まだまだ自然いっぱいを残した古い酒造・醤油造の町の魅力は現代人をひきつけて止まないものを沢山もっているものだと教えられました。

私達の久留里はこの神崎町に比べたら、立地条件、首都圏60分以内の交通の利便性、里見伝説の城、戦国ロマン、湖、農産物、景観に優れています。

神崎はたった2軒の酒蔵の人達の努力がこれだけの祭りにしたと言って居ります。

今私達が頑張らないと１０年後には今の町の姿は消えてしまうだろうと唱える人も多くなっております。

写真沢山撮って会議所においてあります。是非ご覧下さい･･･